

JSPS Stockholm Newsletter

Vol. 51



Prologue

01

顔ニューロンとビデオ会議（或いはWeb会議）

News

02

2016年度第1回KVA-JSPSセミナーの開催/汎北欧同窓会会長会議の開催/スウェーデン同窓会幹部会の開催/JANET FORUM2016の開催/フィンランド同窓会セミナーの開催

Reports

04

2016年KVA-JSPSセミナーで講演させていただいて/フィンランド同窓会セミナー「第2回骨と生体材料研究会」/津本新センター長着任に伴う関係機関への訪問/その他打合せ・来会 /コラム～北欧と日本の交流～（平成28年度外務大臣表彰及び春の外国人叙勲）

Academic Information

11

スウェーデン: 上限の無い授業料に歯止めを/スウェーデン: YubiKey 開発者KTH Great Prizeを受賞/スウェーデン: KTH、新来瑞者にIT労働市場への就業を支援/スウェーデン: KTH、時速90kmでのトラック自動運転に成功/スウェーデン: カロリンスカ医科大学 (KI) シルビアプログラム修了者に学位授与/スウェーデン: ルンド大学に国内最大の研究施設「MAX IV」/フィンランド: ヘルシンキ大学ソマリ語プログラムを導入/フィンランド: ヘルシンキ大学、EU圏外からの学生に授業料を課す/ノルウェー&デンマーク: 大学が医療イノベーションの成長をリード/デンマーク: 移住労働者のための教育ローンが急増/デンマーク: 学位取得期間の短縮化、順調に進む/KI Bladet

Notice

20

イベント予定/事業のご案内
カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) 同窓会会員募集
JSPS Stockholm Newsletter 定期購読について

顔ニューロンとビデオ会議（或いはWeb会議）

JSPSストックホルム研究連絡センター長 津本 忠治

のっけからヒトやサル脳には顔ニューロンという面白い神経細胞が存在するという話をすると神経科学の話かと敬遠されるかも知れない。しかし、顔ニューロンの存在は、従来の直接対面型（Face-to-Face）会議に代わって最近利用されるようになってきたビデオ会議或いはWeb会議の意義と限界を考える上で、大変参考になると思われる。特にJSPSのようなグローバルに国際交流事業を展開している組織にとってビデオ会議の採否は大変重要な問題であろうし、本ニュースレターにも報告があるように、ストックホルム研究連絡センターでも各国同窓会活動の情報交換や同窓会役員会議等に利用している。

サルの大脳皮質側頭葉にはヒトやサルの顔或いは漫画の顔を見た時だけに反応し、顔を構成する線分をばらして顔とは見えなくすると反応しなくなるという神経細胞（顔ニューロン）が見つかったのは1980年代初頭である。この顔ニューロンは側頭葉下部のかなり広い部分から見つかり多数のニューロンが存在すると想定されている。その後の研究でヒト脳でも側頭葉の側面に加えて底面の紡錘状回という部分にも顔に反応する領域のあることが発見された。この顔に対して、いわば専門的に反応する神経細胞を我々の脳が多数備えているという事実はヒトのコミュニケーションにおける顔認知の重要さを示すものと考えられる。実際、「顔色を伺う」、「顔が広い」、「顔をつなぐ」、「顔をつぶされた」などの言葉が、多少言い回しは違っても多くの言語にあるように、社会生活における顔認知の重要性は民族を越えて人類に共通のものと思われる。ただ、その後の研究によって、白目（結膜）の目立つ人類では（サルには白目はないという）顔の中でも特に目の動きや視線の重要性が指摘されてきた。実際、対話中のヒトの視線を記録にとると相手の目に最も集中するという。

この観点からみると、顔や目の見えない、例えば電話会議のようなものは、会議の方法としては必ずしも適当なものではないと思われる。また、初期のビデオ会議のように顔が小さくしか見えない装置や時間分解能の悪い装置では発言者の表情や視線或いはその動きが良く見えず発言者の意図を完全に理解するには不十分であった。この点が従来ビデオ会議では、隔靴搔痒、思いうように意見が伝わらないという不満のもとにあったと思われるが、最近、ハード、ソフト両面においてかなり改良されたと言う。その結果、お互いに気ごろの知れた少数の参加者の場合は、ビデオ会議はかなり有効だと思われる。ただ、多数の参加者からなる会議の場合は依然として問題が残っている。

例えば、多数の人からなる会議の場合、ある人の意見に対して賛同している人が多いのか、反対の人が多いのかは周りの参加者の顔を見ればある程度推測できる。つまり、会議の雰囲気或いは空気を読むには参加者全員の顔を見た方が良いと思われる。その意味で参加者全員の表情が同時に実時間で見える装置のない現状では会議の手段としては十分に満足できるものではない。つまり、Face-to-Faceの方がはるかに会議の結論を確認し易く、ビデオ会議では、少なくとも現在のシステムでは、その点が不十分と思われる。

また、SkypeやFaceTime等民間のネットサービスを利用した場合、情報の漏えいや拡散の危険を伴う点も問題であろう。ただ、直接対面型会議は、参加者に長時間の旅行や場合によっては時差ぼけを強いるものであり、組織としても旅費の負担等、大きな問題が存在する。その意味でビデオ会議は有用で今後さらに使用頻度が増えると思われるが、その利用に当たっては、顔や視線の検知専門の神経細胞を備え、その活動をコミュニケーションの重要な手がかりとしているヒト脳の特徴を良く理解した上で使用の是非を検討することが必要であろう。



8月はスウェーデンではkräftskiva（ザリガニパーティー）の季節である。（左）

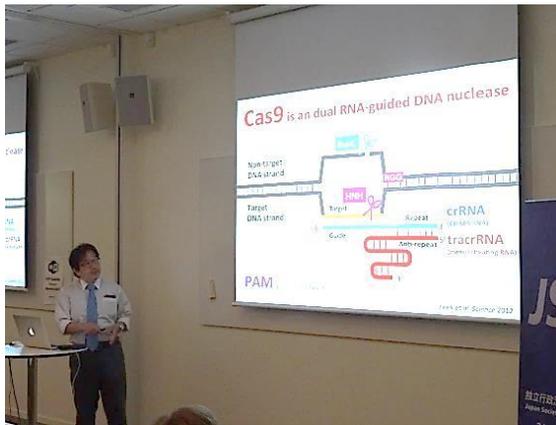
伝統的に月をイメージした顔の絵の飾り付けがされる。（右）

2016年度第1回KVA-JSPSセミナーの開催

2016年6月7日、8日にストックホルム大学およびScience for Life LaboratoryにおいてKVA-JSPSセミナーが開催された。同セミナーはスウェーデン王立科学アカデミー(KVA)との協力により、スウェーデンの各分野の研究において指導的役割を担うアカデミー会員の企画に基づき、同国内での関心が高い著名な日本人研究者を招へいして講演を行ってきているものである。今年度第1回目の招へい講師として、濡木理東京大学大学院理学研究科教授に来瑞いただいた。

セミナーの冒頭で川窪百合子副センター長よりストックホルム研究連絡センターの事業説明が行われた後、濡木教授による講演が行われた。

初日は「Structural Basis for Molecular Mechanisms of Membrane Transporters」をテーマに、ロッカースイッチメカニズム、螺旋スライドメカニズム、ゲーテッドポアメカニズムの他、独自のメカニズムによって引き起こされるイオン、糖、アミノ酸および生体異物の膜輸送体における分子構造の最近の研究成果について講演が行われた。2日目は「Structure-based Development of Genome-editing Tool, CRISPR-Cas9 towards Medical Applications」をテーマに、CRISPR-Cas9と呼ばれるsgRNAsによってゲノム上の位置を特定できるゲノム編集ツールの医療への応用をテーマに講演が行われた。両日共に多くの研究者・学生が聴講に訪れ、講演終了後には質疑応答が活発に行われた。(濡木教授からのレポートは4ページをご覧ください。)



講演中の濡木教授および事業説明を行う川窪副センター長

汎北欧同窓会会長会議の開催

2016年6月22日、汎北欧同窓会会長会議をSkypeを利用したweb会議の形で開催し、スウェーデンおよびフィンランド同窓会会長とストックホルム研究連絡センターとの間で意見交換を行った(デンマーク同窓会会長は急用のため欠席)。まず、スウェーデン同窓会設立10周年記念シンポジウムを好事例として、同窓会主催イベントについて話し合うと共に活動計画について、各同窓会から紹介があった。次に、ストックホルムセンターから、JSPS本部作成資料を基に、他の同窓会の個別の活動例について説明をした。各同窓会会長からは同窓会幹部の役割について説明があり、ストックホルムセンターからは補足説明を行った。最後に、首都圏外にいる同窓会メンバーを含めて同窓会の活動を如何に活性化するかについて議論が行われた。参加者からは多くの提案があり、充実した内容の会議となった。

スウェーデン同窓会幹部会の開催

2016年7月14日、スウェーデン同窓会幹部会を、Skypeを利用したweb会議の形で開催した。スウェーデン同窓会幹部とストックホルム研究連絡センターとの間で、開催予定のセミナーや今年度の予算について意見交換を行った。ストックホルムセンターから予算の変更点について説明がされ、了承が得られた。また、同窓会幹部よりSweden-Japan Academic Networkと同日にセミナーを開催する提案がされ、実施に向けた企画が練られ始めた。

JANET FORUM2016の開催

2016年6月30日、ベルリン自由大学にてJANET FORUM2016が開催された。JANETとはJapan Academic Northern Europe Networkの略称*である。欧州内に連絡事務所や研究・留学拠点を持つか、活動展開をする日本の大学・学術機関の緩やかな連合組織であり、2015年11月5日に発足した。

本フォーラムは、JANETの発足後初の合同イベントであり、日本側から57名、ドイツ側からは70名ほどの参加があった。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、北島国際協力員が出席した。

今回のフォーラムでは、「研究紹介」をテーマとして、日本側各大学・機関による特色ある研究の紹介や、欧州で活躍する日本人研究者によるドイツおよび欧州の研究環境についての講演が行われた。会場には参加機関のブースが展示され、欧州と日本の機関担当者間で活発な情報交換が行われた。

*JANETの活動範囲が欧州全域に拡大したことに伴い、JANETの名称からNorthernが除かれ、新名称が定められることとなった。新名称は未定だが、略称はJANETのままとなる。



各機関のブース

フィンランド同窓会セミナーの開催

2016年8月7日～9日、フィンランドのイナリにおいて、フィンランド同窓会セミナーとして「第2回骨と生体材料研究会」が開催された。イナリは北国フィンランド中でも最北部に位置する北極圏の街であるが、フィンランド国内、日本等から20名の研究者が集まり、当センターからは津本忠治センター長が出席した。

Petri Lehenkariオウル大学教授、埴隆夫東京医科歯科大学教授からの開会の挨拶に続き、津本センター長によるJSPSの事業説明が行われた。その後、活発な発表・討論が行われ、同研究会が取り扱うテーマの重要性について再認識する有意義な意見交換の場となった。また、終了後は早くも第3回の研究会が2018年に日本で実施されることが決まるなど、各国の研究者交流も一段と深まったセミナー開催となった。

(埴教授からのレポートは5ページをご覧ください。)



事業説明を行う津本センター長

2016年KVA-JSPSセミナーで講演させていただいて

東京大学大学院理学系研究科・教授 濡木理

Stockholm University のGunnar von Heijne博士にご推薦をいただき、JSPSからご招待をいただき、2016年6月6日から10日までスウェーデンのストックホルムに滞在し、2回のKVA-JSPSセミナーをさせていただきました。

6月7日はStockholm Universityで膜輸送体(トランスポーター)の講演をさせていただきました。膜に埋め込まれた膜輸送体タンパク質は、細胞内外のイオン、糖、代謝産物、異物(薬物など)の輸送を的確に行うことで、細胞内環境を維持しています。ヒトの遺伝子の30%以上が膜蛋白質をコードしており、創薬ターゲットの50%以上が膜蛋白質であることから、膜蛋白質研究は生命原理の探求のみならず、医薬学への応用にも極めて重要です。我々は、特に膜タンパク質を脂質中で結晶化し、シンクロトロン放射光(SPring-8)の高輝度マイクロビームを用いてデータを収集することで、これまで構造解析が不可能であった生理的に重要な膜輸送体の構造を高分解能で次々と明らかにし、分子機構(基質識別機構、輸送駆動機構、輸送制御機構)を世界に先駆けて解明してきました。

本講演では、硝酸/亜硝酸イオン交換輸送体NarK、鉄輸送体Fpn、Ca²⁺/H⁺交換輸送体CAX、糖輸送体SWEET、アミノ酸排出輸送体YddG、リン酸/トリオースリン酸交換輸送体GPT、薬剤排出輸送体MATEの話させていただきました。NarKとFpnはMFSというスーパーファミリーに属し、Rocker-Switchメカニズムで輸送を行ないます。CAXはHelical-Sliding機構で、YddGはBinder-Clip機構で、YddGとGPTは同じDMTスーパーファミリーに属しGated-Pore機構で、MATEはHemi-Rocker-Switch機構で輸送を行ないます。それぞれ異なる構造変化を行いながら細胞外開構造、閉構造、細胞内開構造を繰り返し、輸送を行なうのですが、基質と結合することで、膜貫通ヘリックスのProやGly部位でヘリックスが屈曲し、構造変化が誘起され輸送サイクルが回ることが共通原理であることを発表しました。

講演後、Stockholm Universityのキャンパス内でお昼ご飯となったのですが、キャンパスが国立公園と連続しており、非常に牧歌的な美しい草原内に建つレストランでの食事でした。午後は、Stockholm Universityの様々な研究者とディスカッションをしたのですが、特に印象に残ったのは、Gunnar von Heijne博士との話で、リボソームで合成されたタンパク質が出口から出るまでにfoldingする状態を様々なタンパク質に関して、力学的に、またクライオ電子顕微鏡を用いた構造解析に基づいて研究されていたことは、非常に感銘を覚えました。翌8日はカロリンスカ研究所内のScience for Life Laboratoryで講演を行いました。

今回は、我々のもう一つの研究課題であるCRISPRの分子機構とゲノム編集ツールの開発で、最新のデータである高速原子間力顕微鏡の結果も披露し、Cas9タンパク質がDNA上をslidingしながら特異的な配列を見つけ切断するまでを1分子リアルタイムでお見せすると、セミナーに出席されていた研究者の方々からたくさんの質問をいただきました。また、新しいCRISPRであるCpf1の構造から分子機構を説明し、新しいゲノム編集ツールとして非常に興味を持っていただけたかと思います。ゲノム編集は、バクテリアの獲得免疫機構が日本で最初発見されながらも、アメリカで実用化されてしまった研究ですが、まだまだ医療応用、産業応用に至るまでには、ツールの革新的な開発が必要ですので、我々の立体構造に基づいて改変して行く余地があることも講演させていただきました。午後は、研究所内に新たに導入された最新のクライオ電子顕微鏡を見せていただき、クライオ電顕の分野でも大きく遅れをとっている日本にとっては、喉から手が出るほど欲しい設備でした。海外では、個人の寄附が多額なので、このような高価な機械が容易に導入できることは、非常に良いシステムであると感じました。

翌9日はJSPSにお邪魔して、ノーベル賞を受賞された山中博士や、赤崎博士もJSPSストックホルム研究連絡センターが開催したセミナーで講演されたとお聞きして、深い感銘を覚えました。その後、山崎スウェーデン大使とお会いする機会をいただき、30分ほどお話しさせていただきました。とても良くお話を聞いていただき、日本のサイエンスの現状・問題点、特にゲノム編集技術とクライオ電顕技術の立ち後れについてお話しさせていただきました。

こうして私の人生初のスウェーデン滞在は充実したうちに幕を閉じました。支援していただきましたJSPSの皆様(特に川窪様)、ご推薦いただきましたGunnar von Heijne博士、たいへんお世話になった友人のDavid Drew博士に心から感謝いたします。



濡木教授による講演

フィンランド同窓会セミナー「第2回骨と生体材料研究会」

東京医科歯科大学生体材料工学研究所 教授 堀 隆夫

2016年8月7日～9日、フィンランドのイナリにおいて、フィンランド同窓会のセミナーとして「第2回骨と生体材料研究会」が、JSPSストックホルム研究連絡センターの支援で開催されました。この研究会は、日本とフィンランドの研究者によって組織され、オウル大学のPetri Lehenkari教授とJuha Tuukkanen教授が準備をしたものです。

研究会には、日本、フィンランド、スウェーデンから20名の研究者が参加しました。Petri Lehenkari教授と私からの開会挨拶の後、JSPSストックホルム研究連絡センターの津本忠治センター長がJSPSの国際交流支援と活動について説明しました。参加者の自己紹介に続いて、日本から11件、フィンランドから6件、スウェーデンから1件の各30分の発表と討論が、3日間に渡って行われました。骨の再生、骨-材料間の界面現象、骨結合と骨形成を加速するための材料の表面改質について、真剣な議論が行われ、体内埋入部材(インプラント)の失敗を避けるために、これらの研究がいかに重要なかを再認識しました。また、参加者は視点と発想についての意見交換を行うことができました。

研究会終了後には、数年以内に第3回研究会を望む声が多かったため、日本、フィンランド両国の担当者は、3日間の良好な学術関係を維持するために、2018年10月に日本で次回研究会を開催することにしました。また、新たな共同研究の芽ができています。



セミナー開催の様子および参加者による集合写真

津本新センター長着任に伴う関係機関への訪問

2016年6月の津本忠治新センター長のスウェーデン赴任に伴い、各関係機関を表敬訪問した。お忙しい中、貴重な時間を割いてご対応いただいた関係機関の皆様にご礼申し上げます。

在スウェーデン日本国大使館訪問(6月13日)

山崎純在スウェーデン日本国特命全権大使、渡邊慎二参事官、佐藤政文一等書記官を訪問した。当センター活動概要の説明の後、日瑞国交樹立150周年イベント等、今後実施を控えているイベントについて意見交換を行った。

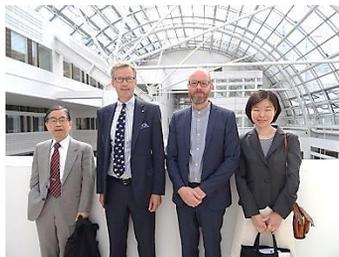


教育研究省 (Ministry of Education and Research) 訪問(6月14日)

Mattias Jennerholm 氏を訪問し、日瑞間の協力関係、教育予算、大学のグローバル化、女性研究者の割合等について意見交換を行った。



スウェーデン戦略財団 (SSF) 訪問(6月15日)



Lars Hultman CEOおよびJoakim Amorim氏を訪問した。先方から、同財団の概要や事業について説明を受けた。センターからはJSPSの国際事業やセンターと協力関係にある機関の説明などを行った。また、両国間の学術研究分野での交流状況、補助金やフェローシップ等に関する情報交換が行われた。

ストックホルム大学訪問(6月15日)

Anders Karlhede科学学術担当副学長、Elisabet Idermark国際関係シニアアドバイザーを訪問した。日瑞の大学環境の相違点や、日本の大学における英語化の問題、今後の日瑞の大学間交流等に関して、意見交換を行った。



ノーベル博物館訪問(6月16日)

Olov Amelin館長、Eva Windrup事務部長、Katarina Nordqvistシニアキュレーターを訪問した。博物館内の日本人受賞者関係の展示について案内いただいた後、Amelin館長執務室にてノーベル博物館の活動内容等について説明いただいた。



スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)訪問(6月16日)

Göran K. Hansson事務総長、Per Hedenqvist常任理事、Heléne Sundström科学担当官を訪問した。当センター活動概要の説明を行った後、KVA-JSPS seminar、Sweden Japan Academic Network、Fellowship programについて意見交換を行った。その後、KVA内施設を見学させていただいた。



ノーベルメディア訪問(6月17日)



Mattias Fyrenius CEOおよびLaura Sprechmann 副CEOを訪問した。双方の機関から概要や最近の活動状況についてそれぞれ説明があった。また、ノーベル・プライズ・ダイアログ2015が成功を収めたことについて、ノーベルメディアの協力に感謝の意を伝えた。さらに、JSPSとノーベルメディアの関係は「学術振興」という同じ目的を共にする最も価値のあるパートナーシップである点を再確認した。

スウェーデン研究・高等教育国際協力財団(STINT)訪問(6月21日)

Andreas Gothenberg事務局長、Hans Pohlプログラム・ディレクター、Agneta Granlundアシスタント兼プログラムマネージャーを訪問した。STINT側より、体制や活動内容についてご説明いただいた。また、津本センター長より、JSPSフェローシッププログラム(外国人特別研究員(欧米短期)、サマー・プログラム)への協力に対する感謝を表すると共に、懸案事項について相談した。さらに、日瑞学長会議のフォローアップについてSTINTの考えを伺った後、STINT側より、日本とスウェーデンの学術交流状況について、分析データを元に説明を受けた。

スウェーデン・イノベーションシステム開発庁(VINNOVA)訪問(6月21日)

Joakim Appelquist 事務局長、Henrik Friden 国際部プログラムマネージャー、Brigitta Boman プログラム担当者を訪問した。VINNOVAからは、同機関の概要と活動状況について説明いただいた。当方からは、フェローシップ(外特一般及び招へい短期)への推薦協力に感謝を述べると共に、申請数が少ない問題点の打開策として今後のプロモーションのあり方について意見交換を行った。



スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)訪問(6月27日)

IVAのBjörn O. Nilsson会長、Maria Dollhopf国際コーディネーター、瑞日基金のEdvard Fleetwood事務局長を訪問した。今年度開催するIVA-JSPSセミナーのテーマや講演者などについて打ち合わせを行った。津本センター長から「ロボット工学」をテーマとして提案したところ、IVA及び瑞日基金の賛同が得られ、テーマが決まった。続いて、ロボット工学の分野で実績を上げている講演者候補についての説明を行った。当訪問には在スウェーデン日本国大使館の佐藤政文一等書記官にも同席いただいた。



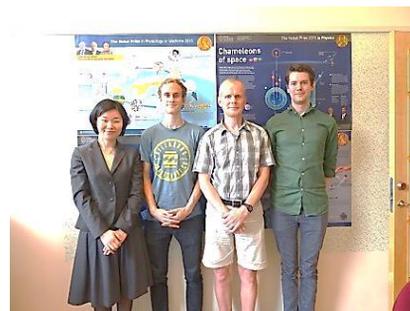
その他打合せ・来会等

海外研究連絡センター長会議(5月13日)

津本センター長が、JSPS東京本部で開催された海外研究連絡センター長会議に出席した。ワシントン(米)、サンフランシスコ(米)、ロンドン(英)、ボン(独)、ストックホルム(瑞)、ストラズブール(仏)、バンコク(タイ)、北京(中)、カイロ(エジプト)、ナイロビ(ケニア)の各センター長およびサンパウロ(ブラジル)からはアドバイザーが参加し、各研究連絡センターの昨年度活動が行われた。その後、センターの管理運営、日本人研究者ネットワーク、危機管理体制について議論が行われた。

Joel Peterson氏の来会(6月3日)

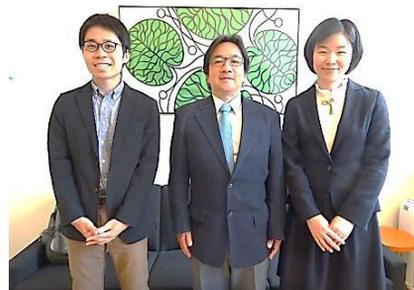
SAC(スウェーデン同窓会)メンバーのJoel Peterson氏が当センターを訪問した。今年の10月にBorås大学で開催予定の同窓会イベント準備にあたり、予算、会場や招聘者の手配、広報の点について意見交換を行った。また、Joel氏がフェローとして滞在していた信州大学とBorås大学との今後の交流の可能性についても意見交換を行った。



濡木 理 東京大学大学院理学研究科教授の来会・大使館訪問(6月9日)

平成28年度第1回KVA-JSPSセミナーの招聘講師として来瑞された濡木教授が当センターを訪問された。当センターからセンターの活動概要について説明を行い、濡木教授から最近の科研費制度のあり方に対する意見をいただいた。

その後、日本大使館にて、山崎純大使を表敬訪問した。研究内容について説明すると共に、産学連携や今後の研究を発展させるために必要な方策について会談した。当センターから、川窪副センター長が随行した。



磯部 靖博 広島大学リサーチ・アドミニストレーター(URA)の来会(6月23日)

広島大学リサーチ・アドミニストレーター(URA)の磯部氏が当センターを来会した。磯部氏から広島大学の国際化への取組み、海外の機関との交流状況等について説明いただいた後、津本センター長から当センターの活動概要について説明を行った。



東北大学KTHリエゾンオフィス訪問(7月4日)

川窪副センター長、ニルセン オフィス・アシスタントが、スウェーデン王立工科大学(KTH)の東北大学リエゾンオフィスを訪問した。高木敏之東北大学教授、Fredrik Lundell KTH准教授から当リエゾンオフィスの役割、研究内容や東北大学とKTHとの協力状況などについて説明いただいた。



コラム～北欧と日本の交流～(平成28年度外務大臣表彰及び春の外国人叙勲)

北欧諸国・バルト三国での功績や、日本との交流における功勞に対し、以下の方々が平成28年春の叙勲者、平成28年度外務大臣表彰受賞者として選出された。

平成28年度 外務大臣表彰受賞

氏名	肩書き	功績内容
ゲンナル・リンデル (通称:リンデル・儘盟・ゲンナル)	ストックホルム大学 アジア・中東・トルコ学部日本学科教授	スウェーデンにおける日本文化の普及
驪城 久子 (芸名:小牧 游)	ストックホルム日本人会顧問	日本とスウェーデンにおける相互理解の促進
フィッシャー・緑	元 デンマーク日本人会会長	在留邦人への福祉功勞
ケストゥース・プタカウスカス	盆栽スタジオ、取締役	リトアニアにおける日本文化の普及

平成28年春の外国人叙勲

氏名	主要経歴	功勞概要
バーバラ・キャンノ	元スウェーデン王立科学アカデミー会長 元ストックホルム大学教授	日本・スウェーデン間の科学技術交流及び相互理解の促進に寄与
セッポ・キマネン	チェロ奏者 現 カウニアイネン音楽祭芸術監督 元 クフモ室内楽音楽祭創立者兼芸術監督 元 北九州国際音楽祭フェスティバルアドバイザー、音楽監督	日本・フィンランド間の音楽を通じた交流及び相互理解の促進に寄与

現在の日本と各国との良好な関係があるのは、今回受賞された方々や各地でご活躍されている多くの方々の支えがあつてのものである。ある国に対して興味を持つきっかけとして、文化面からの影響は大きい。また、文化的な話題は、互いのバックグラウンドを知る上で欠かせない。文化の普及や相互理解の促進と一口で言うのは簡単だが、実際に行うとなると話は別である。未だにスウェーデン語はおろか英語での意思疎通にも苦勞している筆者には想像もつかない大変な道のりがあつたものと思う。

日本と北欧の正式な交流の歴史を遡ると、1867年に江戸幕府がデンマークと修好通商航海条約を締結して始まつたものが最も古い。一方、非公式な交流ではオランダの東インド会社との貿易が鎖国時代からあつた。オランダ人と称して他の国籍の外国人も日本を訪れており、植物学者リンネの弟子であるトゥンベリもその1人だ。長崎の出島に一年ほど滞在し、帰国後、旅行記を残している。旅行記には当時の日本社会を觀察した記述がある。トゥンベリも当時彼と交流のあつた日本の蘭学者や医者達も、150年後にまでその交流が伝えられているとは想像していなかつただろうが、当時の日本を知る貴重な資料となっている。

彼らの交流は今ある学術交流の原型とも言える。異なる考えを持つ相手からの視点を通じ、自らを捉え直し、新しい知見を得る。そしてその交流は、顔の見える関係と互いを尊重する姿勢が無くては成り立たないだろう。学術交流も根本は人と人の付き合いであることには変わらない。スウェーデンでは7月から続いていたバカンスシーズンがそろそろ終わりを迎える。街の人通りも普段通りになってきた。この休みのどこかであつた小さな交流も、将来に続く大きな交流に繋がるのかもしれない。

(中兼 優介)

【参照】

外務省ウェブサイト

http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_003483.html

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/protocol/jokun.html>

吉武信彦著:「日本人は北欧から何を学んだか」

スウェーデン：上限の無い授業料に歯止めを

スウェーデンでは、かつては高等教育にかかる費用は税収で支えられ、国籍に関わらず学生個人の授業料負担は無かった。しかし、2011年秋より、EU/EEA*（欧州経済領域）およびスイス以外からの留学生に対し、授業料徴取が導入されている。

スウェーデン国営ラジオ「Dagens Eko」は、同様の教育コースであっても大学によって授業料に2倍の開きがあることを受け、国内の高等教育機関において授業料がどのように決定されているかを特集する番組を放送した。

番組によると、ヨーロッパ外からスウェーデンに来た学生は、年間100,000スウェーデンクローナ（約120万円）以上支払わなければならないが、実際に同コースにかかる費用はその半分であった事が報じられた。

この結果に対し、Helene Hellmark Knutsson高等教育研究大臣は「費用が高額すぎることは明らかだ。前政権ではコースにかかる費用の上限を特に定めず、各大学に委ねて授業料徴取を導入した。」とコメントをしている。

その結果、学生組合は、教育の質向上に繋がっていないとして授業料を廃止することを要求し、Jan Björklund前高等教育研究大臣・自由党党首は、学生への過剰な授業料請求の有無について調査を要求することになった。

Dagens Eko は、スウェーデンの大学が広報費および授業料管理・留学生勧誘のための管理体制費を教育プログラムにかかる費用に含めていることを明らかにした。

Helene Hellmark Knutsson大臣は、秋に国内の大学国際化改善のための委員を任命するとしているが、Johan Alvforsスウェーデン学生組合委員長は現状の即時改善を求めている。Alvfors氏は、ヨーロッパ外からの学生に対する授業料が2011年に導入された後、ヨーロッパ外からの学生数は60%まで落ちこんだと述べ、授業料の導入がスウェーデンの高等教育の改善に繋がっていないと主張している。

<関係者からの反応>

・Eva Malmström Jonssonスウェーデン王立工科大学(KTH) 副学長

本学では法外な授業料を課してはいない。留学生への追加経費を加味した費用計算は問題ないとする。

・Lena Adamsonストックホルム大学准教授

私は、授業料徴取の導入や、導入後の結果分析がされていないことに批判的であった。我々は、スウェーデン国内で留学生から得るもの以上に、彼らが卒業後にスウェーデン国内外にもたらす恩恵を失っている。

・Jan Björklund前高等教育研究大臣（授業料導入時の大臣）

高等教育機関が得た授業料の用途を調査すべきだ。機関が求める費用が高すぎる場合はその算出根拠を示すべきであり、減額も必要である。

・Niklas Traneusスウェーデン文化交流協会マーケティング・ストラテジスト

学生組合の意見はよく知られているものであったが、ほとんどニュースになっていない。

この種の調査の実施が求められているのは、大学側が授業料戻入等の規則に関して曖昧さを残しているからだだろう。政府は高等教育のさらなる国際化を進めようとしているが、私は授業料が撤廃される可能性は少ないと見ている。北欧諸国の傾向はその反対であり、フィンランドでも同種の授業料を導入している。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

*EEA(European Economic Area)

欧州経済共同体(EEC)と欧州自由貿易連合(EFTA)にまたがる経済領域。両者は、1972年に自由貿易協定を締結し、さらに1994年1月には、双方にまたがる広範な共同市場を目指す欧州経済領域(EEA)を発足させた。

【出典】

University World News

<http://www.universityworldnews.com/article.php?story=20160512221554171>

【参考】

Sweden.se

<https://sweden.se/society/higher-education-and-research/>

スウェーデン: YubiKey開発者 KTH Great Prizeを受賞

発明家であり起業家のStina Ehrensvärd氏が、今年のKTH Great Prizeを受賞することが、スウェーデン王立工科大学(KTH)より発表された。同氏はYubiKeyの開発者として知られる。YubiKeyとは小型のUSB・NFCセキュリティデバイスで、高性能であることから「ハッカーの悪夢」とも言われている。アメリカ国防省、Google、Facebookなどの世界的な組織も彼女の会社Yubicoの顧客であり、YubiKeyユーザーは数百万人にのぼる。

KTHは、授賞理由として「データ流出が増えている今、Stina Ehrensvärd氏はより安全なデジタル空間を創るというビジョンを持って会社を成長させてきた。真の起業家としての情熱と専門性を持ち、彼女はインターネットの安全のための画期的な暗号解決策により、短期間で大きな成功を収めた。」ことを挙げている。受賞者には、120万スウェーデンクローナ(約1,500万円)の賞金が贈られる。

Peter Gudmundson KTH学長は、「Stina Ehrensvärd氏は、KTH Great Prizeの受賞者として大変ふさわしい。イノベーションと起業家精神の組合せることが、彼女にとっても本学にとっても社会的課題に向き合うための鍵である。ITの安全性はデジタル化した世界にとって不可欠であり、彼女の取組みが重要である理由もそこにある。」と述べる。

Stina Ehrensvärd氏は受賞を驚きとともに喜びつつも、Yubicoの成功は自分ひとりで成し得たものではないことを強調し、今までずっと一緒に会社を発展させてきた夫のJacob Ehrensvärd氏と、受賞の喜びを分かち合いたいと述べている。

また、Stina氏は、若手のイノベーターへのアドバイスとして、以下の通り述べている。「インスピレーションとハードワークが成功の秘訣です。現実の問題に対する解決方法を見つけましょう。その解決策や、製品、サービスのために数年を費やそうという考えでじっとしてられなくなり、それを嬉しく感じるのであれば、あなたは正しい道にいます。あなたに足りないものを補ってくれる良いチームと共にいましょう。そして、大きなことを考えて、自分の直感に耳を傾けましょう。」

<KTH Great Prizeとは>

1944年に寄付金により創設された。本賞は、画期的発見や新たな価値の創出を通じ、実生活上で得られた発見の独創的な応用により、スウェーデンのものづくりに貢献した者、科学研究で、特に重要な原理や応用に有益な法則を見つけ、上記の目的を促進した者、もしくは芸術活動により人々の精神生活に大きな影響を与えた者に贈られる。なお、受賞者はスウェーデン国民に限られる。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

スウェーデン王立工科大学(KTH)ウェブサイト

<https://www.kth.se/en/forskning/artiklar/it-entreprenor-far-kth-s-stora-pris-1.655751>



Stina Ehrensvärd氏
(KTH ウェブサイトより転載)



YubiKeyの実物
(Yubico社ウェブサイトより転載)

スウェーデン:KTH、新来瑞者にIT労働市場への就業を支援

スウェーデン王立工科大学(KTH)のコンピューターサイエンス・コミュニケーション学部はWallenberg 財団からの資金提供を受け、EU圏外の国から新たに来瑞した人材をスウェーデンのIT部門で雇用できるようにするための教育訓練を行う。この教育プログラムには、3か月から5か月にわたるプログラミングの集中学習が含まれる。

同学部のMattias Wiggberg氏はこの訓練がIT産業のニーズを満たすとともに、新来瑞者がスウェーデン国内労働市場に入っていく際の支援になれば、と話す。同氏によると、条件を満たす人であれば比較的短時間、500時間ほどのプログラミング訓練で、スウェーデン国内企業が求めるスキル要件を満たせるという。

この委託教育プロジェクトは人材派遣会社と連携している。KTHがカリキュラム、教育内容、講師について責任を持ち、IT部門の雇用者らは教育内容を労働市場のニーズに合わせるための調整に関わる。これは、訓練コースの修了者が卒業と同時に就業できるようにするという考えによるものだ。

「このプログラムは、十分な就業訓練を受けていても、居住許可の取得後スウェーデン国内労働市場に入る足がかりをつかめずにいる人達に向けたものだ。我々は多くの人々を統合する上で、直面しているギャップを埋める支援をしていきたい。」とWiggberg氏は話す。

プログラム申込者は大学教育(技術分野が望ましい)か、それに同等する業務経験が必要とされ、約30名が入学試験、面接を経て選ばれる。Wiggberg氏によれば、うまくいけば、秋には訓練が開始される予定である。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

スウェーデン王立工科大学(KTH)ウェブサイト

<https://www.kth.se/en/aktuellt/nyheter/kth-to-help-new-arrivals-get-foot-in-it-job-market-1.655940>

スウェーデン:KTH、時速90kmでのトラック自動運転に成功

Scania社とスウェーデン王立工科大学(KTH)の研究者らによる開発中の自動運転トラックが、最高時速90kmでのテスト走行に成功した。KTHによれば、テストの成功を受け、1~2年以内に採掘作業におけるトラックの自動運転の開始を目指している。

KTHで制御工学を研究するBo Wahlberg教授によると、道路の中央ラインから最大誤差20cmでの走行が可能で、高速であっても正確な運転ができるとされる。

KTH、Scania社、リンショーピン大学、Saab社、Autoliv社が政府ファンドにより協力している「iQMatic」プロジェクトでは、鉱山のような厳しい環境下での全自動運転トラックの開発を目指している。実際の鉱山での実演が秋頃に予定されている。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

スウェーデン王立工科大学(KTH)ウェブサイト

<https://www.kth.se/en/forskning/artiklar/researchers-have-come-a-long-way-with-self-driving-trucks-1.642722>

スウェーデン:カロリンスカ医科大学(KI)シルビアプログラム修了者に学位授与

5月17日、カロリンスカ医科大学での学位授与式で、6名の医師がシルビアプログラムを修了した。修了者のうち1人は日本、3人はスウェーデン、1人はルクセンブルグ、1人はドイツで働いている。式典はシルビアヘメット財団の20周年記念と合わせて行われ、シルビア女王から学位記が直接手渡された。

この認知症ケアに対する2年間の修士プログラムは、学生の医療実務と連係して完結する。このプログラムは遠隔能力開発コースとして実施され、学生は各自の勤務地から授業をオンラインで受講し、学んだことを即座に実践に生かすことができるようになっている。

「このプログラムで、異なった国々にいる同級生と共に勉強することができた。また、新しい科学的知見を得ることができ、認知症と認知症ケアのための関係知識を深めることができた。今後この経験を生かして行きたい。」と、プログラム修了者の1人、ドイツの内科医であるUrsula Sottong氏は述べる。また、日本の内科医である遠矢純一郎氏も「この修士課程を通じて、体系的・包括的に認知症について学ぶことができた。日本において家庭医向けの認知症ケア教育システムを作っていきたい。」と話す。

*遠矢医師へのインタビュー記事全文は以下のURLより御覧頂けます。

<http://ki.se/utbildning/the-student-network-made-learning-interactive-and-insightful>

<補足>

カロリンスカ医科大学は、シルビアヘメット財団と協力して認知ケアの修士課程を設置している。同修士課程修了者は卒業式で女王から学位記が渡される。シルビアヘメット財団は1996年にシルビア女王により設立され、認知症分野のケア、教育、研究促進に取り組んでいる。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

カロリンスカ医科大学ウェブサイト

<http://ki.se/en/news/new-silvia-doctors-received-their-diplomas>

<http://ki.se/en/education/masters-courses-in-dementia-care-0>

シルビアヘメット財団ウェブサイト

<http://www.silviahemmet.se/>

スウェーデン:ルンド大学に国内最大の研究施設「MAX IV」

6月21日、ステファン・ロベーン首相は、MAX IV Laboratoryの開設をカール16世グスタフ国王陛下及び国内外からの来賓者500名の前で宣言した。MAX IVは、スウェーデンで最大かつ最も期待の高いシンクロトン放射光研究のための電子加速器研究施設である。世界で最も明るい光源のX線装置を持ち、2,000人以上の国内外からの科学者の受入れが可能である。同施設では物質科学、構造生物学、化学、ナノテクノロジー等の分野の研究が行われる。当日は、施設内のガイドツアーに加え、歌やダンスによるセレモニーが盛大に行われた。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

ルンド大学ウェブサイト

<http://www.lunduniversity.lu.se/research/max-iv-ess/inauguration-of-max-iv>

<http://www.lunduniversity.lu.se/research/max-iv-and-ess>

【関連】

ストックホルム研究連絡センターニューズレターVol.47(P11)

<http://www.jsps-sto.com/admin/UploadFile.aspx?path=/UserUploadFiles/NLJapanese/150924JapaneseNL47.pdf>

フィンランド：ヘルシンキ大学ソマリ語プログラムを導入

ヘルシンキ大学は、2017年秋よりソマリ語学を正式な教育プログラムとし、修士課程への進学を可能なものとする。コースはソマリ語ネイティブスピーカー向けのもの、非ネイティブスピーカー向けの2つがある。ソマリ語学習を行う学生の定員数はまだ確定していないが、同大学のArto Mustajoki教養学部長は毎年6~8人ほどの学生の入学を想定している。フィンランドにおいて少数だったソマリ語話者は現在相当数いるため、ソマリ語を大学で採用するのは妥当であるとし、これは単なる言語教育だけでなく文化的な要素を含んでいると同学部長は述べている。

ヘルシンキ大学は、中国語・アラビア語での教育プログラムへの入学者を年15名まで増やすことを目指しており、英語プログラムの入学者数も需要増に伴い、20~25名まで増やそうとしている。対照的に、ドイツ語とフランス語のプログラムについては需要が少ないため、将来的に縮小される。

<ソマリ語>

アフロ-アジア語族のうちクシ語派に属す言語。ソマリア連邦共和国の公用語。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

Yleisradio, Finnish Broadcasting Company(フィンランド国営放送)

http://yle.fi/uutiset/helsinki_university_to_offer_degree_in_somali_language/8882376

【参考】

外務省ウェブサイト

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html>

フィンランド：ヘルシンキ大学、EU圏外からの学生に授業料を課す

ヘルシンキ大学は、EUおよびEEA(欧州経済領域)圏外からの大学院生に対し、13,000~18,000ユーロ(約150~200万円)の授業料を課すことを発表した。授業料は2017年秋から始まる外国語で行われる34の修士プログラムに適用される。

同大学の説明によると、授業料はプログラムにかかる費用だけでなく、プログラムの概要や、他大学(特に北欧)で課している授業料の額を加味した上で決定するとしている。

授業料導入は、ヘルシンキ大学で進められている教育改革と共に導入される。既存の学位取得プログラムを合理化し、教育の質と学際的側面を強調する予定である。新しく設置する修士課程プログラムの半分以上は外国語で行われる。同大学のKeijo Hämäläinen副学長は、この改革で教育課程の国際化を進めて修士課程の学生数を倍増させたい、と話す。授業料導入により学生に対する経済支援が必要となるため、奨学金制度も検討されている。詳細は、次年度中に決まる予定である。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

ヘルシンキタイムス

<http://www.helsinkitimes.fi/finland/finland-news/domestic/14004-university-of-helsinki-to-introduce-tuition-fees-of-13-000-18-000-for-non-eu-eea-students.html>

ノルウェー及びデンマーク：大学が医療イノベーションの成長をリード

ノルウェーでは医療イノベーションに関する会議が行われ、デンマークのコペンハーゲン大学ビジネススクールと保健学科では、経営学と医療イノベーションを組み合わせた新修士プログラムが発足した。これらは、北欧諸国で医療イノベーション研究及び、保健科学と経営学から成る新しい学位課程への関心が高まっていることを示す2つの兆候である。

<ノルウェー>

ノルウェーの医療関係機関から成るコンソーシアムは、ノルウェー社会において健康産業と医療研究が果たす役割の調査に参加し、更なる成長と国際化において障害となるものを見極めようとしている。

以前より、医療研究及び医療イノベーションへの投資は、石油産業を除いた全ての研究開発投資額を上回ることが政府により報告されていたが、最新の見積りはそれを更に上回る。健康に関する民間での研究は、臨床医学を除き主に大学で行われている。また、臨床医学であっても特許は大学で開発されていることがある。

オスロでの会議で、**Kristin Skogen Lund**ノルウェー企業連合会長は、「健康産業は、変化が求められているノルウェー経済にとって、その答えの中心となるものである。高度な研究への貢献や大規模輸出によって、健康産業は非常に大きな可能性を秘めている。」と述べる。

また、**メノンエコノミクス**(ノルウェーのコンサルティング会社)は、以下のように述べている。「福祉国家としてのノルウェーは多くの問題に直面している。高齢化や癌・認知症などの病気の課題は、今後数十年でさらに大きな問題となり、特に経済面ではここ数年、問題が表面化している。ノルウェー内の他の様々な大規模産業の収益は下がっているが、民間健康産業は成長中の国際市場に乗って国内で有数の産業に発展する可能性がある。また、同時に今後数十年における多くの健康・介護問題の解決策にもなり得る。」

Ole Petter Ottersenオスロ大学長はこの会議に参加し、自身のブログで、「健康産業には、手付かずの巨大な可能性があり、研究に基づいたイノベーションが成長産業に転換されていくことが課題だ。」と述べた。

<デンマーク>

デンマークの主要紙、**Jyllands-Posten**は6月8日、健康産業はデンマークの経済成長の柱になると報じた。毎年1,000億デンマーククローネ(約1.5兆円)以上の製品を輸出しているとし、これはデンマークの総輸出額の12%に匹敵する。

ブリュッセルで行われた欧州委員会主催の個人向けの医薬品に関する会議の場で、デンマーク製薬産業の重要人物である**Peter Høngaard Andersen**コペンハーゲン大学ビジネススクール非常勤講師兼イノベーションファンド・デンマークCEOは、今年の秋にコペンハーゲン大学で医療イノベーション分野における全く新しい修士課程を開発することを発表した。

「このプログラムは、公共の医療従事者・健康産業を対象とし、世界の医療制度の仕組みを幅広く理解することを目指している。コペンハーゲン大学の**Master of Science Innovation in Health Care (MSc IHC)**は、世界初の医療イノベーション分野に関する2年間の修士プログラムである。世界の主要大学もこの分野のコース設置に乗り出している。」と**Andersen**氏は述べる。

また、**Finn Valentin**同大学ビジネススクール教授は、「デンマークは最高水準の医療制度を持っているが、高齢化と病気に関わるライフスタイルの課題に直面している。一連のイノベーションがこれらの課題に取り組むために必要であり、医療イノベーターに新しいタイプの人間が求められている。この新しい修士プログラムはまさにそのようなスキルを育てるために設計されている。」と話す。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

University World News

<http://www.universityworldnews.com/article.php?story=20160617201056108>

デンマーク:移住労働者のための教育ローンが急増

デンマークに来るEU市民の急増を受け、Ulla Tørnæs高等教育科学大臣は、教育ローン/奨学金政策が外国人学生を引き付ける「大きすぎた看板」なのか、塞がれるべき抜け穴なのかを見極めるため、調査を急いでいる。

大臣は、今年の費用が2013年の政党間合意額を超えるのではないかと懸念している。同省によると、過去2年で、EU/EEA(欧州経済領域)圏内から来た1,500名以上の市民が教育機会と教育ローン/奨学金(SU*: State Educational Grant and Loan Scheme)を得るために同国に来ている。彼らは、週10~12時間の労働を条件に「migrant workers」としてSUの受給が認められる。また、英語で大学教育を受けられることが特にEU/EEAの学生を引き付けていると言う。

Tørnæs大臣は次のように述べている。「教育とSUを受けるためにデンマークに来るEU市民の急増に憂慮している。多くの人がデンマークに無償教育とSUを得るために訪れ、その後、母国に戻ってしまう事態は全く想定されていなかった。我々は外国人留学生が卒業後、職を得ているか、英語教育の質と労働市場への関連性が充分か調べなければならない。

デンマークへの学生流入は、2013年2月に欧州司法裁判所が、「migrant workers」の身分を持つのであれば、EU/EEAからの市民はSUを受ける権利があると判断を下したことによる。これは事実上、学生らは、週に最低10~12時間の労働をすれば正規学生として登録されることを意味する。この決定により、判決翌年の2014年には東欧からの学生が急増した。

この司法決定の裏には当時の国会での政党合意があり、EU/EEAからの移民労働者への支払いが上限を超えた場合、この合意が改正され得ることになっている。Tørnæs大臣は2016年の上半期にこれを超えることを懸念している。合意額は、SU受給者が5,500人相当いる場合、400万デンマーククローネ(約6,200万円)となっている。

*SU (State Educational Grant and Loan Scheme)

デンマーク人学生かEU/EEA圏内からの学生であれば社会的身分に関わらず教育を受けるための公的支援が受けられる制度。主なプログラムとして、①18歳以上で、普通高校か専門高校に通う者、もしくは専門教育訓練プログラムの受講者を対象としたものと、②高等教育機関への入学者を対象としたものの2つがある。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

University World Newsウェブサイト

<http://www.universityworldnews.com/article.php?story=201605191043106>

【参考】

Uddannelses og forskningsministerウェブサイト

<http://www.su.dk/english/state-educational-grant-and-loan-scheme-su/>

外務省ウェブサイト

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/eu/keyword.html>

デンマーク:学位取得期間の短縮化、順調に進む

デンマークは修業年数以内に学位を取得しない学生数を減らす努力を続けており、学位取得までの平均期間は過去10年間でかなり短くなっている。

2006年は、学士と修士の取得に平均で6.43年がかかっていたが、2013年には5.88年まで短縮された。修業年限内で卒業する割合も、2000年の23.6%から2013年には26.4%に上昇している。最も大きな変化としては、学位取得に2年以上の遅れが生じている学生の割合が、2000年の26.3%から2013年に12.4%と半減した。

デンマーク学長会議では次のような報告がされている。「修業年限内に卒業しない学生が焦点となっている。事実、政治家も修業年限内に卒業することを重要視し、修業年限内に卒業する学生の割合に基づいて2016年の予算7億7700万デンマーククローナ(約118億円)を各大学に配分している。」

“Who are the delayed student?”と冠されたその報告では、2013年のデンマーク内の全ての修士課程学生のデータを元に算出結果が出されている。卒業の遅れには多くの要因があり、以下の分析結果が示された。

・女性の方が男性より、卒業に時間がかかっている。2年以上の遅れに関しては男女差はほとんど見られないが、修業年限内に卒業する割合は男性30.4%、女性23.4%となっている。

- ・デンマークの両親を持つ人の学生は、移民の両親を持つ学生より早く卒業している。
- ・教育を受けた期間が短かった親を持つ学生の長期留年率は低い。反対に、教育を受けた期間が長かった親を持つ学生の長期留年率が高い。
- ・人文学専攻の学生が、卒業まで最も時間がかかり、技術分野を専攻する学生は最も期間が短い。

長期に教育を受けてきた親を持つ学生は、高等教育で優秀な成績を修めるということがよく報告されているので、高学歴の親を持つ学生はよく勉強すると考えられていたかもしれない。しかし、データの裏付けはないようだ。高学歴の親を持つ学生は、卒業後の就業を有利にするため、あえて大学に長く留まっていることが理由として考えられる。なお、同報告では大学間でこれらの結果に大きく差があることが明らかになった。

大学入学開始年齢と卒業の遅れにも関連性がある。2年以上遅れている学生は、あまり遅れがない者に比べ入学年齢ずっと高い。その逆に、修業年限内に卒業する学生も、2年未満の遅れで修了する者に比べて入学年齢が高いことがわかった。

デンマーク学長会議は、様々な原因が学生が学位取得期間に影響を与えていると結論付け、原因の一部は家族の病気や死など、学生自身でコントロールできないものがあるとしている。

学位取得にかかる期間は、Ulla Tørnæs 高等教育科学大臣が大学改革のために取り組んでいる問題の一つである。大臣は、卒業した修士・学士の人数を元に配分されている現在のやり方から、労働力としての需要が高い分野の卒業生を多く輩出している大学に多くの予算を配分する方法への転換を模索している。

しかし、Lykke Friik コペンハーゲン大学副学長は、「特定の職種への需要に結び付けられた配分は後ろ向きな発想である。既に政治家らは人文学への予算縮小、募集人員を削減させている。」として、この流れを止めるよう政治家に警鐘を鳴らしている。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

【出典】

University World News

<http://www.universityworldnews.com/article.php?story=2016062217433581>

“KI Bladet” ~2016 NO.3~より

ストックホルム研究連絡センターがオフィスを置くカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) では、“KI Bladet”という学内誌を発行しています。誌上で提供されている内容の一部を紹介いたします。

KI Bladet <http://ki.se/nyheter/ki-bladet-karolinska-institutets-personaltidning>

ライト学長代理によるプロローグ

ライト学長代理は、卒業生へのメッセージと共に、改革を進める学内について、以下のように述べた。

本学は6月に卒業式を行いました。卒業生一人一人にとって、喜びと誇りに満ちた日であったでしょう。卒業した彼らは、私達の仲間・同窓生になりました。カロリンスカ医科大学で学ぶことを選んだ学生は、人の健康の改善に貢献し、数え切れないほどの人々の生活を豊かにするための素晴らしい経験をしてきています。新たな卒業生全員のこれからの幸運を願っています。

こういった式典は、カロリンスカの教育プログラムを本学の理想の実現にかなうものにするべく本学教職員が取り組んでいる仕事に注目する機会にもなります。私達は、高度人材のニーズが高い社会セクターに合うプログラムを、提供し続けています。学士課程のプログラムの質は高く評価されています。私達は、大規模な博士教育も引き続き行っています。本学が輩出した博士は大学界に残る人もいますし、医療や製造業に進む人もいます。

失敗や欠陥は学びの源泉です。昨冬の騒動は、私達に有益な知見とより一層謙虚であるという教訓を残していきました。私達には問題を見極め、対処する勇気がありました。これは感謝すべきことです。本学はこの困難を経て、より良い大学として力強く立ち直っていくことでしょ。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)



写真:ライト学長代理
(KI ウェブサイトより転載)

次期学長の選考プロセス

次期学長は、以下の予定で選出される。

- ・2016年6月1日～8月15日：学長候補者のノミネート受付
- ・2016年8月・秋学期以降：候補者の選考・面接の実施、諮問団体の投票および学内委員会で候補者決定
- ・2016年11月上旬：大学からの提案された候補を受け、政府が次期学長を決定
- ・2017年1月～3月：新学長就任

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

次期学長への高まる期待

2012年に行った前学長選考以前に、カロリンスカ医科大学は、幅広く、積極的な学長を発掘プロセスを採っている。価値観の変化や、学長の役割が如何に重要で複雑になってきたかを話し合ってきた。

次期学長に対する期待はより高まっている。大学理事会議長兼選挙委員会委員長のLars Leijonborg氏は、カロリンスカ医科大学には率先力のあるリーダーであり、有能なアカデミックの代表者であることが必要と話す。次期学長はスウェーデン語を話せる必要のない代わりに、カロリンスカ医科大学が如何に医療に関わっていくかを十分に理解していることが求められる。他には、国際的に有名であること、教育面で優れていること、学問としての医学に十分に精通していることが挙げられている。また、高度のコミュニケーション能力と高い倫理観も重要視されている。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

倫理観の改善に向けて

Henrik Grönberg副学長代理は、カロリンスカ医科大学は、法律、規則、価値観に対する倫理的な議論を区別するだけでなく、開かれた学術環境を作り、特定の研究グループが孤立している状態を打破すべきだと話す。①カロリンスカ医科大学(KI)とストックホルム市議会の協力関係の責任区分をより明確する際にKIにおいてリスクとなり得る環境と活動②カロリンスカの教員が海外で行った研究の熟知③学外活動に関するより詳細な報告、の3つの原則が計画に取り入れられようとしている。

(JSPSストックホルム研究連絡センター 訳)

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしています。ストックホルムセンターHPをご覧ください。最新情報をご希望の方は以下URLから登録してください。

<http://www.jsps-sto.com/contact.aspx>

Seminar on Student and PhD candidate mobility between NTNU and Japan

ノルウェー科学技術大学(NTNU)同窓会と日本・ノルウェー学友会(NorAlumni Japan)が、ノルウェー教育国際協力センター(SiU)とNTNU日本事務局と共催して、NTNUと日本の交流促進をテーマにしたセミナーを開催します。

日 程:2016年9月7日(水)

会 場:ノルウェー科学技術大学

Joint SPing-8-MAX IV Laboratory Workshop on New Light Sources and Biological Applications

大阪大学蛋白質研究所、ウプサラ大学細胞分子生物学研究所、MAX IV Laboratory、高輝度光科学研究センター(JASRI)、理化学研究所(Spring-8 Center)、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、生命科学と次世代光源をテーマにしたワークショップを開催します。

日 程:2016年9月8日(木)、9日(金)

会 場:MAX IV Laboratory(ルンド大学)

The 3rd Tokyo Tech - Uppsala University Joint Symposium

東京工業大学、ウプサラ大学、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で「Energy and Environmental Technology」「Material Sciences」「Energy Systems and Analysis」「Entrepreneurship and Innovation」「Mathematics」「Applied and Nuclear Physics」「Serious games and human interface」「Digitalization」の8分野に関するセミナーを開催します。

日 程:2016年9月12日(月)、13日(火)

会 場:ウプサラ大学

Japan-Lithuania Joint Life Science Symposium

リトアニアリサーチカウンシルにて、生命科学をテーマにした日本・リトアニア合同シンポジウムが開催されます。

日 程:2016年9月13日(火)

会 場:Research Council of Lithuania

Life Sciences Baltics Forum 2016

Enterprise Lithuaniaが生命科学をテーマにしたフォーラムを開催します。

日 程:2016年9月14日(水)、15日(木)

会 場:Lithuanian Exhibition and Congress centre LITEXPO

KI Cancer Retreat

カロリンスカ医科大学、東京大学、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、癌研究をテーマにしたシンポジウムを開催します。

日程:2016年9月26日(月)、27日(火)

会場:Djurönäset

The 3rd RIKEN CLST Karolinska Institutet SciLifeLab Joint Symposium

理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センター(CLST)は、カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)、SciLifeLabとの共催でFrontiers in Life Science Technologies - Decoding Health and Diseaseをテーマにした合同シンポジウムを開催します。

日程:2016年9月29日(木)

会場:カロリンスカ医科大学

2016年度第2回KVA-JSPSセミナーの開催

スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)とJSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、KVA-JSPSセミナーを開催します。

日程:2016年10月13日(木)ルンド天文台、
10月17日(月)ストックホルム大学、
10月18日(火)ウプサラ大学

講演者:井田 茂 東京工業大学地球生命研究所教授

スウェーデン同窓会セミナー(1)の開催

スウェーデン同窓会、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、セミナーを開催します。

日程:2016年10月11日(火)

会場:スウェーデン王立工科大学(KTH)

テーマ:Novel Methods for Using Music Interaction to Address Wellbeing and Health Improvement in Training and in Leisure

スウェーデン同窓会セミナー(2)の開催

日程:2016年10月20日(木)

会場:Textile Fashion Centre-University of Borås, The Swedish School of Textiles

テーマ:Paper Yarn Textiles and Fashion-a compostable raw material for the future

2016年度第3回KVA-JSPSセミナーの開催

スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)とJSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、KVA-JSPSセミナーを開催します。

日程:2016年10月26日(水) ウプサラ大学
11月1日(火) スtockホルム大学
11月3日(木) ヨーテボリ大学

講演者:佐藤昌利 京都大学基礎物理学研究所教授

All Alumni Meetingの開催

フィンランド同窓会、北海道大学ヘルシンキオフィス、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、All Alumni Meetingが開催されます。

日程:2016年10月27日(木)

会場:未定

事業のご案内

二国間交流事業(共同研究・セミナー)

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者(若手研究者を含む)が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。

<http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/jrss.html> (日本語版)

<http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/index.html> (英語版)

外国人研究者招へい事業

(Fellowship Programs for Overseas Researchers)

本事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。

平成29年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

<http://www.jsps.go.jp/j-fpo/index.html> (日本語版)

<http://www.jsps.go.jp/english/e-fpo/index.html> (英語版)

その他

カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet) 同窓会 会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍した事があり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

<http://ki.se/en/collaboration/ki-alumni-and-friends>

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを jspss-sto@jspss-sto.com までお送りください。電子メールにて配信します。



表紙写真: Skogskyrkogårdenの十字架

Skogskyrkogårdenとは「森の墓地」を意味し、その名前のお通り、広大な森の中に墓石が点在する。ストックホルム市立図書館など数多くの建築を手がけたエリック・グンナール・アスプルンド(Erik Gunnar Asplund)が設計に携わり、彼自身もここに埋葬された。1994年に世界遺産に登録されている。

(撮影 中兼 優介)

JSPS Stockholm Newsletter 第51号

編集長: 川窪 百合子

編集: 中兼 優介

発行日: 2016年8月19日

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561

Website: <http://www.jspss-sto.com/> E-mail: jspss-sto@jspss-sto.com

JSPS
STOCKHOLM